

## 「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 国分義行

本研究も第3年目を迎え、一応の結論を得て終了するわけであるが、この3年間の研究につき総括的に評価してみたい。この研究の発端は昭和56年から開始されており、今回は第2期3年間の研究を続けてきたのであるがその研究効果はすばらしいものであったと思う。子どもは人間解明の原点であり、この姿を明らかにすることは人間の姿を明らかにする第一歩といえることができる。したがって人間学研究の第一歩となるものであるが、それだけに1つの研究方法、たとえば医学あるいは小児科学のみをもってすることは不可能であり、多くの学際領域の協力によってなさねば不可能であることがよく知られていたのであるが、現実には各学際領域の協同によって研究を行うことは必ずしも容易なことではない。この研究班においては見事にそれを確立したところに大きな功績があったといつてよいであろう。たとえば子どもの人間形成に欠くことのできない行動の発達形成をみるにしても、従来の小児科学的研究のみではなく母子相互作用の面から産婦人科学と小児科学とが協

力して研究するとともに心理学の領域からの協同研究がなされ、さらに動物を使用しての実験も可能であることを明らかにした。これは飼育ニホンザルを用いたお茶の水女子大の浅見千鶴子氏らの研究、京都大学理学部の長谷川真理子氏らの研究、大阪大学人間科学部の糸魚川直祐氏の研究などによってもその実験の可能性が実証されたといつてもよい。また東京大学産業機械工学科 岩田洋夫氏らによりコンピューターを使用することによって母子間のコミュニケーションの定量的な分析が可能であることも示され、工学の技法を用いることも非常に大切であることが明らかになった。このようにあらゆる学際領域の協同実験によって母子関係の解析が可能であることをこの3年間の研究によって明らかにし、今後はこのような研究態勢をととのえていくことの重要性を明らかにした点で、見事な研究結果をあげたと評価してよいし、これらが基礎となって新しい研究が今後さらに広がっていくようにしたことは本研究の3年間の業績としてみられたといつてよいであろう。